

伝統構法・石場建てで住宅

耐震シミュレーションも

伝統構法、石場建てによる木造住宅が、ウォールスタットによる耐震シミュレーションを実施して建設された。伝統技術を最新のシミュレーション技術で評価する取り組みとして注目される。

この住宅は神奈川県に建設された。施主は大磯町の準防火地区内「20代の頃、西岡常一



▶内外壁を真壁で仕上げた。足元は石場建て

棟梁の本を読み、日本の気候・風土に合った石場建てで建てたいと思っ



▶丸太柱を中心にした木組み

た」という。インターネットで調べて本巧舎（神奈川県足柄下郡、木村真一郎社長）に問い合わせた。「石場建てでできる」と快諾をもらい、話は進んでいく。

木村社長は、技術的には問題ないが、現行法への適合が大きな課題と考え、悟工房（同鎌倉市、山中信悟社長）に相談した。悟工房は伝統構法に対応し

た限界耐力計算や鎌倉市の耐震改修などの仕事に取り組んだ経験があり、日本建築センタ―と神奈川県建築安全協会に連絡。適合性判定と建築確認について申請を受け付けてもらえるよう確認し、作業を始めた。

何が一番苦労したかといえば「ヨイトマケ」と木村社長。石場建てをする東石を配置する地盤作りのため、重い木材を大勢の人が力を合わせて縄でつり上げ、落とし、固める作業だ。これを10人（引き手は9人）で、土日を使い3カ月間にわたって実施した。施主の知人・友人らが延べ250人参加し



耐震シミュレーション結果を説明した

など天竜地区の天然乾燥を行う製材工場から調達した。柱・土台は松、梁は杉。角、5寸角、7寸角などを使い、伝統構法の接手を採用。梁は渡り

て行った（土壁塗りも含めて）。地盤をパワ―ショベルで掘ってぐり石を入れ、ヨイトマケで突く。場所によっては1・2層も突き固めたという。大きな音が響き、町役場や警察などにも相談しながら作業を進めた。使用する木材は天竜材。フジイチ、アマノ

行い、内外真壁、現しり、施主にシミュレーション結果を報告した。耐震性能に問題がないことを、動画を見せながら説明した。

木村社長は、伝統構法に積極的に取り組んでいくため、自社で簡易製材機、低温乾燥機を導入し、土塗壁の土も作り始めた。

山中社長は「適判、確認機関からは、継続的な伝統構法の建築を期待されている。せっかく審査できるノウハウを得ても、仕事が続かないと技術が伝承されない。ウォールスタットによる時刻歴応答解析でも確認が取れるようになればいい」と今回のプロジェクトを総括した。